「接触忌避尺度」開発の試み

河野和明¹・羽成隆司²・伊藤君男¹
(東海学園大学人文学部¹・椋山女学園大学文化情報学部²)
キーワード：対人嫌悪感, 身体的接触, 性差

Development of the Contact Avoidance Scale
Kazuaki KAWANO¹, Takashi HANARI² and Kimio ITO¹
(¹Faculty of Humanities, Tokai Gakuen University, ²School of Culture-information, Sugiyama Jogakuen University)
Key words: interpersonal disgust, physical contact, sex difference

対人嫌悪感とは、人間の日常的な社会生活や対人ストレスを理解する際に重要な感情と考えられる。ところが、社会心理学において対人魅力が大きな研究領域となっているのに対し、対人嫌悪感はいまだあまり検討されてこなかったと言える。一般的な嫌悪感の個人差を測定する心理尺度としては、Haidt, McCauley & Rozin(1994)の尺度などが代表的なものであり、様々な研究において使用されている。また、対人嫌悪感の内容については、因子分析的研究(斎藤, 2003)も見られる。しかし、特定他者に対する強い嫌悪感の測定を目的とした尺度は少ない。

そこで、本研究では、対人嫌悪感を測定する尺度の開発を試みる。対人嫌悪感を好意度の逆と単純にとらえるなら、これまで開発されてきた愛情や好意度を測定する尺度を用いれば十分である。しかし、ここでは、いわゆる“生理的な嫌悪”、すなわち身体的接触への拒絶を伴うより強い嫌悪(接触忌避)を想定する。そして、接触忌避を測定するために作成した項目の妥当性について検討し、さらに、接触忌避の程度が、嫌悪対象者の性と回答者の性によってどのように異なるかを分析する。

調査

【方法】対象者 東海地方の学生、計 228 名(男性 101 名、女性 127 名)を調査対象とした。平均年齢は 20.56 歳(年齢範囲 18~43 歳、SD2.27)であった。

接触忌避を測定する項目の作成 身体的接触への拒絶感を測定する尺度を作成するために、直接および間接の身体的接触を伴う行動を多数挙げ、その中で、(1)実際の行動として比較的想定しやすく、(2)あからさまに性的接触を目的とする行動を含まず、(3)比較的回答が一方の極端に偏りなくいと考えられるものを選出することによって、8 項目を選定した(Table 1)。回答は 7 件法(7:非常にしたくない~1;まったく平気)とした。

質問紙 これまで出会った人の中で、「最も生理的な嫌悪を感じる男性(気持ちの悪い感じがする男性、接触したくない男性)」をひとり想起することを求めた(以下、想定男性)。また、該当する人物がいないう場合は、「最も好きになれないと感じる男性や最も好感度が低い男性」とするよう求めた。評定に先立って、想起した人物のイニシャルまたはキーワードの記入を求め、その後、その人物に対する感情 6 項目(嫌悪感・好感・かわいそう・いたたまれない感じ・優越感・軽蔑)について 7 件法(7:非常に感じる~1;まったく感じない)で評定を求めた。さらに、その人物に対する接触忌避の程度を前述の 8 項目で尋ねた。続いて、まったく同様に「最も生理的な嫌悪を感じる女性」の想起を求め(以下、想定女性)、想定男性と同様の評定を求めた。この後に、Haidt et al.(1994)による嫌悪感尺度の和訳項目(32 項目)を投入した。回答者に記名は求めなかった。

【結果】接触忌避を測定する項目の因子分析 接触忌避を測定する 8 項目に対して回答者の男女ごとに因子分析(主因子法)を行ったところ、男女に因子構造の違いはほとんど認められなかった。そこで、以下では、男女込みのデータで因子分析を行った。固有値の減衰状況および固有値 1 以上の基準から、強い 1 因子性が示された(説明率：想定男性について 50.0 %；想定女性について 60.2 %)。各項目に対する因子負荷量を想定男性と想定女性ごとに示す(Table 1)。尺度の α 係数は想定男性について.88、想定女性について.92 であり、高い一貫性を示した。また、当該項目を除いた合計得点に対する各項目の相関係数は想定男性について.47~.75、想定女性について.54~.83 であった。G-P 分析を行ったところ、すべての項目に高い弁別力が認められた。 α 係数が当該項目除外前より増大する項目が 1 項目[項目(3)]のみ見られたが、除外前後の差(想定男性について.0039、想定女性について.0026)はきわめて小さかった。これらの

結果から、使用した 8 項目が接触忌避尺度として妥当であると判断し、その合計得点を接触忌避得点とした。接触忌避得点は、Haidt et al.(1994)による嫌悪感尺度の得点と中程度の有意な正相関(.32 ~.36)を示した。また、対象人物に対する単純な嫌悪感の評定と接触忌避尺度には、想定男性について.34、想定女性について.32 の有意な正の相関が認められた。

Table 1. 接触忌避を測定する尺度の項目と因子負荷量 (主因子法 1 因子解)

項 目	因子負荷量	
	想定男性	想定女性
(1) じかに箸を入れて同じ鍋料理を食べる	.700	.861
(2) 握手する	.758	.802
(3) 小さなテーブルで向かい合って話をする	.479	.567
(4) その人が長時間座ったイスに座る	.696	.768
(5) その人がずっと使っていたコップで飲み物を飲む	.787	.849
(6) 人工呼吸で自分の口からその人の口に息を吹き込む	.572	.691
(7) その人が入った後のお風呂に入る	.812	.835
(8) その人が使った後の洋式トイレに入って大用を足す	.786	.792

性差の分析 嫌悪感の評定と接触忌避得点の平均値を、回答者および想定人物の性別に示す(Figure 1)。

Figure 1. 嫌悪感評定(左)および接触忌避得点(右)の平均値

回答者の性×対象者の性の 2 要因分散分析を行った。嫌悪感評定については対象人物の性の主効果のみがみられた($F(1, 224) = 40.53, p < .0001$)が、接触忌避得点については交互作用が有意($F(1, 225) = 48.88, p < .0001$)であり、多重比較(LSD 検定)の結果、想定男性に対する女性の得点が高くなる傾向がみられた。また、想定女性に対する女性の得点が高くなる傾向がみられた。

考察

ここで作成した接触忌避尺度は、尺度としての一貫性が高く、想定男性・女性に対する得点が一般的な嫌悪感尺度得点および対象人物に対する単純な嫌悪感評定と正相関であり、同時に、相関は中程度であった。これらのことから、本尺度は一般的な嫌悪感尺度と異なる心理尺度として一定の水準を満たすものといえる。さらに、回答者の性と想定人物の性について、接触忌避にのみ交互作用が現れ、女性が対象の性によって大きく得点を変化させていることから、接触忌避が性的な防衛をより鋭敏に反映する指標である可能性を示唆している。今後は、本尺度の信頼性と妥当性を多様な対象人物について確認するとともに、対人嫌悪感の性差の検討を行うことが課題である。

引用文献

Haidt, J., McCauley, C., and Rozin, P. (1994) Individual differences in sensitivity to disgust: A scale sampling seven domains of disgust elicitors. *Personality and Individual Differences*, 16, 701-713.
斎藤明子 (2003) 対人嫌悪感情に対する社会心理学的研究.九州大学心理学研究. 4. 187-194.